
悪魔との変な関係

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔との変な関係

【Nコード】

N3540D

【作者名】

レイン氷花

【あらすじ】

上級魔フルウと退魔師黒川琥春の変な関係は、主従のような親子のようなおかしいです。

出会い（前書き）

まあ、ちよつとグロテスク、変態じみた表現がありますが、これらも含めて楽しんでくれれば、嬉しいです。

b yレイン氷花

出会い

「疲れた…」

漆黒の塔の上で、同じく漆黒の悪魔フルウは呟く。

あゝ、こんな時は人間界で散歩がいいんだが、最近は退魔師や天使やらが増えたからな。

「はあ…。」

フルウはまた大きな溜息をつく。

何か面白い事はないもんかね？

「ん？」

この音は…人間か。

ドクン、ドクン。

俺を狙ってるのか。

毎度毎度無駄な事が好きだな人間は、まあ暇潰しにはなるだろ。

「出てこい。今なら楽に逝かしてやる。」

「ふん、バレてたか。まあいい、どうせ真正面から行こうと思って

たからな。」

階段から退魔師が姿を現した。

「どうせ暇潰しだ。どこまでも付き合ってやるぞ。」

フルは顔を歪ませて笑って、右腕を振った。

それを見た退魔師は、その場から2 m程後ろに飛ぶ。

「ふむ、人間にしてはいい動きだ。」

フルウはニタリと顔を歪ませる。

「私相手には魔法はいらんという事か？」

そう言うのと、目の前の針山を指差した。

「いや、ただ実力を見たかったからだ。」

退魔師が指差した所を見た。

そこは今まで立っていた足場が鉄筋やらレンガやらで串刺しになっていた。

しかも一瞬で。

「しかし、楽に死ぬチャンスを逃したか、なかなか強いな。いや、運が悪いつて言った方がいいか？」

にたあ

フルウは更に顔を歪ませて笑う。

「黒雲より生まれ、空間を貫き、罪人に裁きを下せ。雷槍！」

退魔師はフルウを無視し詠唱を行い、魔法を発動させた。

フルウに魔法による巨大な雷の槍が迫るが、フルウは右腕をはらって消した。

「相殺！？」

退魔師が驚き、呟いた瞬間には、フルウは目の前まで来ていた。
「お前の実力はこれだけか？」

フルウの右手が退魔師の喉を挟ろうと伸びる。

「まだまだだ。」

退魔師はそれをすんでの所で躲す。そしてそのまま後ろに跳ぶ。

「貴様、手を抜いているな？」

「そうだ。」

「でなければ、楽しくないだろう？」

「ふん、遊んでから殺す気か。いやらしい奴め。」

「褒め言葉だよ、女。」

「私を、悪魔の掟まで破つてまでここに招いたのは何故だ？」

「ほう、そこまで分かっているか、なら答えてやるか。これは只、暇潰しの為だよ、女。」

「ふむ、そうと分かった以上、私に勝ち目はないな。」

それと同時に構えていた銃を落とした。

「ほう、ただの思い上がりではないらしいな。
女、気に入ったぞ。」

「ふん、悪魔に褒められるとはな。
人生何が起こるか分からんな。」

「となると、諦めるのか？
頑張れば、俺に傷一つでもつけられるかも知れんぞ？」

「ふん、嘘をつけ。
貴様は上級魔だろう？ 私が本気を出そうと、傷一つつけられん
だろうな。」

「お見透しか。
女…、せめて名を名乗れ、女。？いや、少女？」

「ふん、そうだな。
最後まで悪い悪魔に名を名乗るのも良いかもな。」

少女は笑う。
今の状況を楽しんでいるかのように。

「ふん、私は黒川琥春という者だ。」

少女は微笑む。

出会い（後書き）

さて、第一話終りです。第二話も連載するので、読んでくれば、嬉しいです。

拷問してお持ち帰り？（前書き）

また、よろしくおねがいします。

b y l e i n 氷花

拷問そしてお持ち帰り？

「ほう、黒川琥春か。
いい名だ。」

「そりゃどうも。」

「しかし、戦意を失った相手を殺すのは面白くない。」

どう殺す？

「考え込んでいる最中悪いが、殺すなら殺すで早くしてくれ。」

琥春が疲れたように言った。

「ああ、悪いね。お前の殺し方を考えていただけだよ。」

そうだ。

「で、琥春。命乞いはしないのか？」

「ふん、無駄だと分かっている事はせん主義だ。」

「死ぬのが怖くないのか？」

「いや、そうゆう運命だと諦めた。」

「面白い人間だな、琥春。」

「ふん、そりゃどうも。」

フルウは琥春の目の前に降りた。

「出来るだけ、いい声で鳴けよ？琥春。」

ニタリと顔を歪ませる。

「ふん、保障しかねるな。」

琥春はニヤリと笑った。

そして、フルウが腕を伸ばし、爪が胸を裂く。

~~~~~

あれから何時間経ったのか分からない。

体を裂かれ、潰され、切り刻まれ、皮を剥がされ、それらの痛み  
に耐え続けた。

ついに時間が分からなくなった。

意識がハッキリしない。

痛みははつきりしているが。

目の前には歪んだ笑みがあつた。

「なかなかいい声だよ、琥春。」

嬉しそうに囁く。

メキメキイ…

「が…！？」  
メギッ

「あ…、ああ！」

「さて、次は筋肉を千切るか。」

プチプチプチプチッ

「あ…、がつ、あああ！」

「どうだ？筋肉を引き千切られる痛みは？」

「ハアハア、思った程つ痛、ぐっ！は、なかった、ぞ？」

「そうか、じゃあ次は腹を開いて内臓をグチャグチャにするか。」

フルウは顔を歪ませて言う。

~~~~~

また、気を失ったか…。

継続的に響く音の方を見る。

グチャッグチャッ

目の前には、顔があった。口のまわりを血に染めるのも構わずに、喰らいついている顔が…。

力が入らないな…。

それでもなんとか右手を伸ばし、フルウの頭の上に持っていく。

フルウは手の動きに気付くが、止める気が無いようで、視線を中に戻して、行為を再開した。

右手で頭を撫でる。

それを見て、フルウは驚愕に目を見開く。

「痛みで正気を失ったか？琥春。」

「いや、まだだ…」

「なら続けよう。」

「そんなに私のは旨いのか？悪魔。」

「人間の、それも女ならば尚更な。」

フルウは視線を中に戻すと、行為を再開した。

おかしい…

そう、思った。

何故そう思ったか。

この行為は、俺が一番好きな殺し方だ。

分からない。

なのに、何かがおかしい。

何なんだ？

思えば、行為を始めた頃からだ。

これは…

何かがおかしいと思い始めたのは。

行為をしているのは楽しい。

だが、何かを欲している。

何かがとてつもなく欲しい。

何が？

血？

肉？

いや、今喰ってるから。

ありえん。

命？

なんでやねん。

男と女の夜の情事？

馬鹿らしい…

大体、俺はそんなに好きじゃない。

じゃ、なに？

この少女と会って、それが欲しいと、感じた。

面白いな。

琥春。

今殺すのは、何か惜しい。

どうしようか。

そうだ、アレがいい。

アレなら欲しい物が分かるまで持って置ける。

視線が、琥春の視線と合った。

手は未だに頭を撫でている。

「持ち帰ろう。」

「は？」

「お前は今殺すには惜しい人間だ。だから屋敷に持ち帰り、玩具にする。決定！文句あるか！」

「大アリだ。」

琥春は変な物を見る様な目で見た。

「ん！？なんで！？あ、そうか！そんな格好じゃ確かに大アリだな。」

「いや、そこじゃ無くてだな、いやそれもあるが、お前のおもちやになると、誰がOKしたんだ？」

「よし！今治すぞ！」

聞く耳持つ気無いなコイツ…

「悪魔に心を売ろうとも、自らの体を傷付けようとも、貴方を助ける為なら我は滅ぶも構わない。」

高位の魔術か？

「悪魔の血。」

フルウが叫んだと同時に、琥春の潰されたはずの四肢が治っていき、最後にお腹や内臓すら、ものすごい勢いで治ってしまった。

な…、凄い…。

「お、おい。」

「さて行くぞ！ついて来い。」

「話が理解出来ないんだが？」

「お前が理解する必要なんてない。」

「お前…。」

「お前は俺の玩具になればいいんだよ。」

フルウは振り向きながら言った。

「ん？なんで裸…ああ、そくだ忘れてた。さて、これでいいだろう。」

そう言い、着ていたローブを琥春に着せた。

「お前は一体何をしようとしてるんだ？」

「ん？ああ、強いて言えば、楽しい事を見つけたとでも言っところ。」

フルウは、ニヤつきながら言った。

「おい、その前に聞かせろ！」

「何を？」

「名前だ、お前は他人に名乗らしといて自分の名前を名乗らない気か？」

「ああ、そうだな。」

フルウは笑いながら振り向く。

「俺の名は、フルウ。フルウ・レインだ。」

悪魔フルウはニタリと顔を歪ませて笑った。

拷問してお持ち帰り？（後書き）

まだまだ書くので、あきないで、どうぞ、宜しくお願いします。

悪魔の御趣味？（前書き）

どうも、駄文ですがまた宜しくお願いします。

悪魔の御趣味？

…何故こんな事に？

「おい、早くしろ。」

何故、私はこんな所に来てしまったのだろうか。

「さて、着いたぞ。」

「ここが俺の家だ。」

そついい、かなり豪華な城を指差す。

「お前、私をここに連れて来てどうする気だ。」

「うん？ああ、そうだな。」

まずは、服を着せて、暇潰しにどっか行く。」

「どっかって、何処だよ。」

コイツめ、さっきから何考えてるのか分からん。

「早くしろ。」

フルウは既に門の前にいた。

とりあえずムカつく奴つてのは分かった。

城に入ると、いろんな階級の悪魔が寄って来た。

「おい！その人間はどうした？」

乱暴そうな悪魔が道を塞ぎ、他の悪魔が問いたです。

フルウは手振りで、琥春に顔を隠すように伝える。

「なに、遊ぶ為に連れて来ただけだ。」

「ぐげげ！飽きたら俺にくれよ！たっぷり可愛がってやるから！」

下品な笑い声をたてながら、醜い顔の悪魔が言った。

「すまんが、この女は気に入ってるんだ。
だからあげねえ。」

「ぐげげ！独り占めする気がこのヤロウ！」

「貴様、その女って成人して無いだろ？
だったら、金80kgだぞ！？」

「ふん、別にいいじゃん。」

金80kg？

「いい加減どけ。」

殺気を放つその言葉に、今までうるさかった悪魔達が、急に静か

になった。

「貴族のガキが！」

「ぐげげ！テメエ、チクるぞ！」

そう言つて、消えていった。

「な！？」

「テレポートだ。」

「テレポート！？」

何故あんな下級魔が使える？フルウ！

「悪魔は皆、魔界の中ならテレポートが使える。」

「なぜだ？」

「今の王が結界を張つたんだ。」

その中なら、どんな所でもテレポート出来るようになってんだ。」

そんなデタラメな事が？

いや、それよりも…

「さっきの金80kgは何の意味だ？」

「ああ、それ。」

今の王がな、神界と契約したんだ。」

「契約？神界と？」

「ああ、何の契約か分からんが。」

「悪魔と神界が契約だと？」

「今の王は比較的穏やかだし、混血でもあるからできたんだろうな。」

「混血？」

「悪魔と神のな。」

「そんな事はある得んはずだが？」

「まあ、半神半悪魔が信じられんのは同感だ。」

悪魔を統べる王が半神？

馬鹿な。

「さっきの金80kgってのは契約の条件の一つで、値段だ。」

女は金50kg。

男は金20kg。

成人してなければ、プラス30kgだ。」

「どうしてそんな物が？」

「悪魔が人間を殺し過ぎない為だと。」

「…その王は何の為に契約を？」

「だろ？俺もそう思った。」

「悪魔は変人ばかりか？」

「それはちがうぞ？」

あの人は俺達悪魔にとって、絶対の法律。
要するに、神だ。」

悪魔にそんな決まりがあったとはな。

「ま、そんな事はともかく。」

フルウは振り向くとニヤつく。

「着いたぞ？」

扉を開け、琥春を招入れると、鍵を閉める。

ガチャン

振り向いたが、既に遅かった。

「何をする気だ？」

「何も？ただ見るだけだ。」

ニタリと顔を歪めせると、何かを取り出した。

何だあれ…、は？！

「メイド服だ！」

「知っている！だがそれをどうするつもりだ！」

「着て貰う。」

「断固拒否する！」

「良いじゃん別に。」

「良くない！」

「減るもんじゃないだろ？」

「うるさい！」

「着ないと殺すよ。」

「ああ！好きにどうぞ！
絶対着ないからな！」

フルウの嗜虐心が目を覚ました。

ニタリと顔を歪ましている。

なんか、やばい事を思い付いたな。

「ふん？じゃあ、無理矢理着替えさせるね？」

ゆっくり近付く。

「くっ！やっぱり！」

琥春は後ずさる。

「逃げ場は無いよ？」

「くそっ！」

逃げ場が無いのは分かっている。

…分かってはいるんだ！だが、アレは…、アレは絶対着たくない！

「行くよ？」

「うつ、」

ぎゃああー！

絶叫中

「すごく似合っているぞ？」

「お世辞はいらん！」

「いやいや、結構似合っているぞ？」

ブチッ

「貴様…！！！」

「貧乳のメイドというのも中々いけ…」

「黙れええ!!」

ボコゴキツ!

琥春の鉄拳がこめかみに直撃し、嫌な音を立てて吹っ飛んだ。

「いったいなあ、褒めてるのに。」

ブン!

高速の回し蹴りがフルウの頭を襲う。

やべ、マジでキレてる。

「ぐほっ!」

「ふん!」

何か怒らすような事言ったかなあ?

「いてて…、そんなに怒るな。」

「ふん、お前が私にこんな服を着せるからだ。」

「別にいいじゃんか。」

それお似合いなんだからさ。」

「こんの馬鹿があ!」

琥春は踵落としを放った。

うん？そう言えば、女は胸が無い事にコンプレックスを抱くとか何とか。

…関係ないか。

琥春の踵落としを避け、目の前に一瞬で移動し、胸に掌をつけて撫まわした。

「な…、あ…あ…っ…」

更に、左胸の膨らみ（多分ある）を鷲掴みした！（てゆうか出来た！横から見たら触れてるだけだが。）

「別にいいじゃねえか？

そんなに気にしなくても。」

ペタペタ

「大体、お前は胸無しの方がイける…、ぞ！？」

フルウは突然背負い投げされて、背中からモロに落ちた。

「いってゝ、何で…」

「慰めてくれるのは嬉しいが、揉みながらは無いよな？」

「おう！？」

コハルさん！？…悪魔のような顔になってますぞ！？」

そだ！他のを試せば！

「琥春！他のも着てくれ！」

「！！！」

「あ、待てゝ。」

またまた絶叫中

「貴様わざとだろ？」

「ん？何が？」

「私が胸を気にしているのを分かってて着せてるだろ？」

「ん？イヤだって、胸無しを使わないと世の中の男達に申し訳ない
と思つてな。」

「コイツ！！！」

「しかし、いいねえ。」

スク水は」

「殺す！！！」

こうして一日が終わった。

そして、何かが始まった。

「おい起きろ！」

ん？誰だ？俺を起こすのは。

「おい！フルウ！起きろ！」

この声は、琥春？

「ん？どうした？こんな朝に。」

「おう？貴様は記憶力大丈夫なのか？」

「ん？何の事…」

ああ、そうだった。

琥春に朝早くに起こせ！って言ったんだっけか。

「ああ、そうだったな。

すまん…。」

「ふん、分かれば良いんだ。」

おかしな奴だな、悪魔に対してこんなにも普通に喋れるとは。

「だから、なのか？

この気持ち。」

「ん？何か言ったか？」

「いや、何でも無い。」

「ふん、そうか。」

てか、同じベッドで寝たんだっとな。

「そろそろ具体的に教える。」

顔を近付け、聞いただす。

「何を？」

「私を殺さなかった理由だ！」

「ああ、またそれ？」

「またそれとはなんだ!!」

「あゝ、うるさい。」

「真剣に答えろ！」

「はいはい、分かりましたよ。」

「はいは一回！」

「はい。」

「よし答えろ！」

「やりたい事が見つかったからだ。」

「それは何だ？」

「お前と暮らしたい。」

「は?!」

「別に変な意味じゃない。」

ただ、お前に興味が湧いただけだ。」

多分、理由はこれだはず。

「な!？」

「とゆう訳で、これから宜しくな。
琥春!」

「チョット待て〜!」

これが、一ヶ月前の会話だった。

そして、悪魔との奇妙な生活が始まった。

正直、さっさと終われ。

悪魔の御趣味？（後書き）

キャラ設定

フルウ・レイン

上級悪魔で貴族

身長176cm

体重58cm

好きな物

ラーメン

メイド服

スク水

その他コスプレ

嫌いな物

ウザイ奴

ガム

煙草

黒川琥春

退魔師で現役女子高生

身長168cm

体重：教える訳ないだろう。（琥春）

良いじゃん、言っちゃえよ。（フルウ）

言つか！（琥春）

好きな物

甘い物全般

可愛い服

ぬいぐるみ

小説

嫌いな物

辛い物

変態

馬鹿

鈍感

悪魔

人間のクズ

フルウ

新たな半神（前書き）

長い間、放置していた小説ですが、これから大切にしていこうと思います。

新たな半神

あれから一カ月が経ち、この生活にも慣れてきた。

そんな訳があるはずもあるはずもなく、こんな生活に慣れる事が出来たなら、私はもう聖人だ。

「次これ着て〜。」

フルウはナース服を掲げてニマっとしている。

シバこうかコイツ。

琥春は本気でそう思うが、そんな事が出来る訳が無いのは分かりきっている為、文句は言えない。…かもしれない。

琥春はセーラー服を脱ぎ捨てて、ナース服に着替え始める。

「しかし最近は素直に着替えてるね？」

「ふん、拒否すればお前が無理矢理着替えさせるだけだろう？」

「当たり前」

「いい加減我慢の限界だが？」

「ん？」

「この変態があー!!」

そう叫ぶと、琥春は下着のままで跳躍し、フルウの胸の位置に踵落としを落とす。

が、フルウは素早く横に避けて、琥春の上体を受け止めると、ベツドに転がる。

「くっ！またっ!？」

「うーん、何かこれも飽きたな。」

フルウは琥春を抱き締めたまま言う。

次は何をしようか、大食い早食いテーブルゲームコスプレエトセトラ。

何か無いか？

「次は何をする気だ。」

「何がしたい？」

「ふん、何も。」

「ふむ、どうするかなあ…」

琥春を抱きながら起き上がる。

「はあ、どこかに行くのもありかな…。」

琥春の頭に顎をのせ、目をつぶる。

「重い。」

琥春の苦情は無視し、溜息を吐く。

「人間界に行ってみるか？ 久しぶりに。」

「…」

「おい。返事は？」

「あ？ 何故だ？」

「いや、人間界に行こうかなあと思ってな。」

モミモミ

「おい？ こら、その手はなんだ？」

「いやあ、久しぶりに揉んでも成長無し、だっ！？」

琥春の肘打ちがフルウの脇腹に直撃した。

「レイン様。お手紙が来ております。」

突然現れたのは、ゴスロリ衣装の仲間、じゃなかった。犠牲者だった。

「ん？ああ。」

この執事は…たしか、セレナ・キュリアっていう中級魔の少女で、主人思い？なブラコン少女で潔癖症で根暗で…失礼した。

「……………」

「ん？どうした。」

フルウが黙ると何か恐いな。

「レイン様。私は雑務が残ってますので、失礼します。」

「おう、すまない。」

セレナという執事は返事を聞くと、消えてった。

「おい、何が書いてあった。」

執事が出ていったのを確認してから質問をする。

「ああ、人間界に行けて、王がな。」

「何故？」

「やって欲しい仕事をして貰う為だと。」

「それは何だ？」

「ん？脱獄犯を始末しろとよ。」

「ほう、お前そんなに頼られてたのか？」

「余計なお世話だよ。琥春。」

人間界か…、今度は何を企んでいるんだ？国王。

~~~~~

「すまん。」

フルウはセレナにすまなそうに言う。

こいつがそんな心を持っていたのが驚きだ。

「いえ、主人の思うように動けるようにするのが、執事の役目ですから。」

セレナも、いつもの無機質な声で言った。

「よし、相変わらずしっかりしているな。」

で、何でこんなにも急なんだ？さっきだぞ？手紙が来たのは。

「じゃあ、出発するぞ。」

「はい、行つてらっしゃいませ。」

「帰って来たら撫で撫でしてあげるぞ。」

いろんな所を。」

セレナは顔を赤らめる。

ああ、コイツ…この変態に惚れてるんだったな。

「理解出来ん。」

「何か言ったか？」

「いや、何も。」

フルウは何かを唱え始めた。

唱え始めて少し経つと、二人の体が黒い光に包まれていった。

闇属性の魔力に、高位の空間操作系の魔術か。

「…発動。」

そこで私の意識は消えた。

「おい、起きろ。」

今は、何時だ？そしてここはどこだ。

「お！やっと起きたか。」

ぐっ！頭がグラグラする…

「さて、琥春も起きたし、どうすっかなー、これから。」

「おい。」

「ん？なんだ？琥春。」

「ここはどこだ。」

フルウは顔を歪ませて、ニタリと笑う。

「お前の生まれた町だ。」

「は？」

今コイツ何て言った！？

「お前の記憶にあった町に来たんだぞ？もつと懐かしがらんのか。」

「おい、これはどうゆう事だ？」

「さっきの魔術は、お前の記憶の中から、一番多く出て来た町に来るためのだ、ガッ！？」

琥春は、怒りの一撃をフルウの鎖骨辺りに入れた。

「全て見たのか？」

「いや、全て見るには時間が足りなくてね。」

「ふん、全部見てたらもう一発を与えてところだが。」

「またやる気だったのかよ。」

「当然だ。」

それにしても私は何気にお姫様抱っこされてるし！！

「いいから降ろせ。」

「駄目。」

「なんでだ。」

「何故なら、目的地に着いていないからだ。」

目的地？そんなものあったのか。

「で、どこだ？」

「お前の家。」

「はあ！？」

「だから、家を教えろ。」

「断固拒否する！」

「その台詞は2回目だ。」

コイツ！本当にム力つく奴だな。

「まあ、」

と、一息つくと、顔を歪ませて笑う。

「見たから分かるんだが。」

「お前！」

「さて、しゅっぱーっ！」

「止めるー！」

またまた絶叫中

「さて、着いたか。」

ちっ、コイツを家の前まで連れて来てしまった。

一方、琥春の心とは反対に、フルウは。

ほう、ここが琥春の家か。

何か楽しくなりそうだ。

「で？ドアは鍵かかっているが？」

今気付いたか、てかしまったってゆう感じだな。

「よし！ドア壊すぞ！」

馬鹿か貴様は。

「よし、先ずは落ち着け。」

何とか壊す事は防げたな。

それよりもこいつは何が楽しいのか、かなり楽しそうに見える。

ガチャン

「お？ドア開いた。」

「ふん、このドアは魔法でロックしてあるからな、鍵はいらんよ。」

「ほう、なら早速入りまゝす！」

「おい！」

「…、女とは思えない程殺風景な部屋だな。」

「…」

「…、女とは思えない程殺風景な部屋だな。」

「うるさい黙れ。二度言っな。」

「セレナでも女っぽい部屋なんだぞ？」

「五月蠅い黙れ。私の自由だ。」

「まあ良いか。これからここに住むぞ。」

「おい、今何て言った？」

「ん？ここに住むって言ったか？」

「冗談だろ？」

「マジ。」

「ふざけるなああ！！！！！」

琥春の怒号は、一キロ先まで届いたそうです。

次の日。

「で？それはなんだ？」

「コスプレ衣装。」

「何故持つて来た？」

「着せる為。」

「拒否する。」

「そのセリフは駄目だぞ琥春。」

「ふん、私の勝手だ。」

「おいお」

ピンポン。

フルウの声を遮り、玄関のチャイムがなった。

「誰だ？こんな時間に。」

琥春は席を立ち、玄関に行く。

ガチャッ

「おはよう、琥春。」

「な！？涼！？」

「いや、久し振りだね。」

「いや、じゃなくて、お前はいつもピッキングでドアを開けて勝手に入るよな？」

「良いじゃないか、そんな事。」

琥春と並んで来たのは、肩まで届かない黒髪に、少々つり上がった目、身長158cmくらいで凹凸無しだがスレンダーな体をした少女だった。

「おや？琥春、君は彼氏が出来たのかい？」

「こんな奴がか？」

「違うのかい？まあいいや、それよりも気になる事があってね。」

「良くないだろう！」

その少女は微笑むとこちらを見た。

「初めまして、悪魔。僕は坂井涼。これから宜しく。」

その言葉に、琥春と俺は固まった。

「おや？何故って顔してるね。」

「お前…どうしてその事を？」

「簡単な事だよ。」

そこで言葉を切り、その坂井涼という少女は微笑む。

「僕は魔術師だからね。」

「「な！？」「」

二人の声が重なった。

「おやおや、構えないでくれないか？悪魔。」

俺の武器が分かってるだ！？

「何が狙いだ？」

「何も？ただ、御忠告をしとこうと思ってね。」

おかしい、この少女の力が跳ね上がった。いや、違うな。今まで抑えていた力を開放しただけだ。しかもこの力はまさに神と同じくらいだ。

「琥春も君も変に構え過ぎだよ。」

涼という少女は呆れたように言う。

「別に君達を殺そうとか思っていないからね。」

「私はお前が魔術師だって事が疑問なんだが？涼。」

「どうしてだい？」

「一度お前の事を調べた事があってな。」

「ふーん、それで？」

「その時の調査結果では、魔法が使えないと出ていたが？」

「それは当然だよ。だって僕は魔術師だもん。」

「真剣に答えろ。」

「こりゃ失礼。なに、簡単な事だ。殆どの魔力を別の場所に移した

んだ。」

「馬鹿な。そんな事をすれば人間の体なんて崩れて行くぞ!？」

「ああ、そうさ。だから僕は、魔力自体の次元をずらし、精神と同じ次元に調律した。」

「人間に出来る芸当じゃないな、お前は何だ？生き物か？」

「くすくす、なあに僕はただ、神の魂を持っているだけだよ。」

坂井涼は笑った。

「けど、只持っている訳じゃない。僕は自分の魂にそれを取り込ませ、半神とへと進化出来た。と言う事だよ。クスクス♪」

「「!!」」

## 新たな半神（後書き）

読んでくださったみなさまありがとうございます。そして御苦労様です。

魔王登場？（前書き）

更新遅くてごめんなさい。

レイン氷花

## 魔王登場？

「はあ…！はあ…！」

夜の町に、黒髪の少女、琥春の荒い息遣いだけがを響く。

「くそっ！人使いの荒い奴め…！」

何が仕事だ？馬鹿か！？

「どいつもこいつも！考えが読めん…！」

琥春はそう愚痴るも、走るのは止めない。

「半神とか何とか！もう意味が分からん…！」

琥春は息切れのせいで苦しいのか、それともここ最近の急な展開に追いつけないのかは知らんが、かなり混乱している。

ちなみに、琥春が走っている理由は溯る事三時間。

「そんなに警戒しなくても、僕は君達に危害を加える気は無いんだ。  
…だからもう帰るよ、じゃあね、琥春。」

と言って、涼は玄関に歩いて行こうとした。が、途中で立ち止ま

って振り返った。

「琥春、その悪魔に食われちゃダメだよ？…勿論、性的な意味で  
。」

「何言つてやがる変態！！」

「じゃ〜ね〜。」と手を振って、今度こそ涼は帰っていった。

……………

「何なんだ？アイツは…」

やっと正気を取り戻したらしい、フルウが未だに引きつっている  
顔を向けて聞いてきた。

私はただその問いに、

「只のド変態でレズ。」

とだけ答えておいた。

「後、この部屋の隣。」

「そうか…そりゃあ、安心して眠れそうにねえな。」

「そつだな。」

勿論的な意味で。

「そうそう、琥春明日は早く起きるよ?」

「何故?」

「明日で指令をクリアしたいから。」

「……あつそ。」

「? 反論はなしなのか?」

フルウは眉間に皺をよせて琥春を凝視する。

「あるとか無いとか、関係ないのだろう? どうせ強引にでもその通りするだろ、お前なら。」

溜息をついて琥春は疲れたように言う。

「よく分かってんじゃないか?」

「何日一緒にいたと思っている。」

あゝ、ここ一か月の痴態を思い出したら自殺したくなってきた…

「じゃ、そう言う事でこの服着れ。」

「だが断る。」

フルウが差し出してきた幼稚園児の服装を見て即答で返す。

「だが着せる。」

「拒否する。」

「なら無理矢理…」

「着てやるよコンチクショウ。」

~~~~~

午前2時。

あれから3時間近くフルウにコスプレさせられ、やっと寝れると思えば、今度は時間だと言って勝手に用を頼んでどこかに行ってしまった。

「……眠い。」

だが寝ようものなら後でフルウに何されるか分かったもんじゃない。
い。

「…はあ…行くか。」

…そして冒頭へと戻る。

目的の場所は、確かアイツの家だったか？

ま、とにかく走って行かないと日が昇ってしまう。

「行くか。」

そして冒頭へと戻る。

「はあっ…はあっ…！ついたっ！」

琥春は息を乱しながらも、フルウの言っていた目的の場所についた。

ピンポーン

「…」

ガチャ…

「琥春、待ってたぞ。」

え？

「何故、お前がここにいる？」

家から出て来た奴は、私が良く知っている奴だった。

「何故って…ここは俺の家なんだから当たり前だろ？」

確かに、そうなんだ、が…

「そんな事より、いつまで玄関で立ち話をする気だ？さっさと上
れ。」

「わ、分かった…」

その男の言うとおりに渋谷家にかかる。

「さて、フルウから話は聞いてるだろう？」

居間に通された私は、無造作に三人掛けのソファに座り、その男は反対側にあるソファに座った。

「何の事だ。」

「……………」

「……………」

「あいつ話してねえのかよ…」

「？どういう事だ？」

「今回の指令内容について。」

「脱獄犯の始末。だったか？」

「そうそう。それでなっ」

「待て、その前にお前とフルウの関係について答える。」

男の話を遮って気になる事を問い質す。

「…分かった。大体の事は教えてやる。」

「…」

「フルウ・レインは、魔王の命令により、現世、つまりこの世界に
来たのは知ってるな？」

「ああ。」

「じゃあ、現在の魔王は誰か知っているか？」

「半神半悪魔という事以外知らんな。」

「じゃあ教えてやる。」

そこでその男は息をはぁ…と吐いて言った。

「魔王の名は…人間だった時の名は、五膳麗二。つまりこの俺だ。」

「な…」

「驚くのは分かるが、まずは話を聞け。」

「…」

「で、今回脱獄したつてのがな、五年前に魔王の座を奪おうとした奴らでな。出来るなら俺がそいつらを処分したいんだが、俺も一国を束ねる王だ。そう簡単に玉座を開ける訳にはいかん訳で、その結果考えたのが、フルウに頼んじゃえ。ってなった訳だ。なんか質問あるか？」

長々と私語もいれての説明をした威厳の欠片も無い男が、疲れたようにソファにもたれかかる。

「とりあえず一言。」

「なんだ？」

「ふざけるなあ！！！！！！」

ゴキ！！

「ぶへあ！？」

魔王登場？（後書き）

内容も微妙ですみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3540d/>

悪魔との変な関係

2010年10月20日13時36分発行